

「なまえつけてよ」(五年)

詩人・作家
蜂飼 耳



登場人物どうしの関わりをせりふ、感情を伝え合おう。登場人物の感情や行動の理由を、登場人物の視点から説明しよう。

なまえつけてよ

蜂飼 耳
比呂 透子 監

学校からの帰り道のことだ。牧場のわきを通りかかると、春花は、まことに見えない子馬がいることに気がついた。
つやつやした毛並りの、茶色の子馬だ。ふんふんまわって見ると、目が合った。子馬は、ぱちりとまはたきました。春花は、その美しい目に、すいこまればさな馬かした。



作業をしていたおばさんや、手を止めて、春花に話しかけた。
「この子、なまえたばかりなの。」
「名前、なめていうんですか。」
「名前、まだ考えてないの。その子、名前つけてよ。」
「一筆書かなくていいよ。春日、その子も牧場のわきを過ぎて通学して居るの。牧場のおばさんは、いつのまにか顔見知りになっていた。でも、あいこまをするだけだ。それなのに、子馬に名前をつけさせてくれるというのだ。」
「じゃあ、考えます。あしたまで。」
「たのむね。」
おばさんや子馬はまわらぬ。春花は歩きだした。歩きながら通学路だ。けれど、まわって知らない道を歩いているような気がしてくる。
名前をつけておぼえられるなんて、初めてのことで、これまでに自分で名前をつけてきたことがある動物に出す。おぼりのことにくくった、おどろしい気分。それ

春花は、学校からの帰り道、牧場で、生まれたばかりの子馬を見つける。牧場のおばさんに、子馬の名前をつけてほしいと頼まれ、「明日までに」と約束する。しかし、翌日、状況が変わって約束が果たせなくなったことを、おばさんから告げられる。がっかりする春花だが、事情を知る、同じ組の転校生・勇太の思いがけない行動に心が少し明るくなって——等身大の子どもの関わりと心情を丁寧に描く。

紙の馬に 気持ちを託して

「なまえつけてよ」の主人公は、春花という小学五年生の女の子です。ある日、牧場で仕事をしているおばさんから、子馬の名前をつけてほしいと頼まれます。子どもにとって、それはとてもわくわくする体験ではないでしょうか。いつも眺めているだけの対象だった馬が、よりいっそう身近な存在となるような体験です。同時に、大人から頼まれたことなので、緊張や責任感も湧いてくるのです。喜びと迷いと緊張感が入りまじる、充実したひとときを春花は経験します。

この物語のもう一人の主人公といってもよい人物は、勇太です。しばらく前に、春花の小学校へ転校してきた勇太に対して、春花はどう接したらよいのか迷います。同級生ということもあって、もつと距離を縮

めたい、仲よくなるう、と思っではいるのですが、なかなかきつかけがつかめませんが、子馬に名前をつけることになった、と春花は伝えますが、素直に驚くのは、勇太ではなく、その弟である陸だけです。勇太のほうは、その場では、あまり関心がないような態度を示します。とはいえ、まったく関心がないわけではないのです。だからこそ、次の日、子馬の名前が決まる場へ陸とともにやって来るのです。

結局、牧場と子馬を取り巻く状況や都合が急に変った結果、春花が一生懸命考え、胸に秘めてその場で運んできた名前は、つけられないことになってしまいます。もちろん、春花はがっかりします。でも、状況が変わったのだから仕方ないと、飲みこみます。その場に居合わせた勇太と陸は、春花の沈んだようすを目にして、どうすることもできず、少し慌てます。こんなとき、いったいどうしたらよいでしょうか。どんな態度をとり、どんな言葉をかけることができるでしょうか。

翌日、学校で勇太が春花に対してしたことは何でしょう。勇太は、紙で折った馬を

春花にそつと渡したのです。紙の馬をひっくり返すと、なまえつけてよ、と書かれています。これは勇太なりに考えたプレゼントのようなものなのです。転校生で、不器用なところもある男の子ですが、同級生の落胆したすがたを目にして、自分なりに何かしたいと思つたわけです。がっかりしたその気持ちはわかるよ、と伝えたいのです。勇太は、それを何か行動で表したい、という気持ちになったのです。あの子馬の代わりに、この紙の馬に名前をつけてよ、というアイデアなのです。春花は、勇太がこんなことをしてくれるとは、と意外な気持ちになります。うれしさと、少し笑つてしまふような気持ちが湧いてきて、春花の心は明るくなるのです。

勇太が春花のためにしたことは、ささやかなことかもしれない。けれど、それは確実に、春花の心を明るくします。ささやかなことであっても、相手に共感しておこなう事は、相手の心に届くものではないでしょうか。春花は、この出来事を通して、勇太の知らなかった面を知ることになります。優しいところや、思いやりのある面を。

友達の間で知らなかった好ましい一面に触れることは一つの喜びです。勇太が渡したものは自分で折った紙の馬ですが、それは、勇太なりの優しさを紙の馬に託したという意味なのです。
さて、春花が考えた子馬の名前は何かだったでしょう。この作品の中に、それは書いてありません。あえて書きませんでした。子馬のすがたを思い浮かべながら、読者のみなさんに、それぞれ自由に考えていただきたいと思つたからです。一生懸命に考えた名前は使われな結果となりましたが、その代わり、思いがけず、春花は勇太の優しい面に触れることになりました。それは同時に、勇太を少し成長させることでもあったのです。

人の気持ちと向き合い、自分にできることは何かを考え、ときには思い切つて実行することは、生きていく上で大切なことであり、喜びの源ともなることです。この作品では、とくにその点を表したいと思しました。楽しんで読んでいただければ幸いです。

はちかい・みみ

一九七四年、神奈川県生まれ。詩人・作家。著書に絵本『うきわね』(ラノックス新社)、小説『転身』(集英社)など。

作者・筆者からのメッセージ

二〇〇〇年『いまにもつるおつていく陣地』で第五回中唐中也賞、〇六年『食うものは食われる夜』で平成十七年度芸術文化庁大臣新人賞。